

景観フォーラム（黒川編）開催状況

日時：平成27年12月6日（日） 13:00～16:00
場所：黒川公民館
参加者：24名

1. 基調講演

「まちづくり・地域づくり ～地元の魅力をほりおこし、みつめなおす」
明石工業高等専門学校建築学科 教授 八木 雅夫 氏

- 例えば文化財を「何で残すか」を考えたとき、その建物の歴史・文化的価値や、景観的価値による評価など色々あると思う。しかし、最近の評価の在り方としては、それを残して活用して、地域社会にとってどうプラスになるかという観点も必要になってきている。
- 住民が主人公になる条件として、持続可能な方法かどうかということが重要。昨今の行政負担の状況において、自主的に支える部分をどうするかというのは大きな課題である。住民が主人公になる活動は、煩わしい部分と楽しい部分の両方がある。色々な苦勞や課題と向き合いながら、納得して受け入れられる力を持つかが大事。問題は問題として関わっていくことで自分の成長を持続させることができるなら、地域に愛着が生まれてくると思う。
- 5段階<ほりおこし・みつめなおし・つくり・いかし・つなぐ>で考える。
「ほりおこし」・・・宝物がどこにあるのかを発見し、整理して情報発信する。
「みつめなおし」・・・情報発信を基に、評価する。
「つくり」・・・活動の実践。（ここでさらに評価する。）
（「つくり」が先行することもあるが、そこから得られる経験の知恵が、「みつめなおし」に戻って、方法を考え直し、新たに進みはじめることもある。）
「いかし」・・・「つくり」という動きの段階。
「つなぐ」・・・文化的・民俗学的行事や産業等と、環境や空間等を一体で考える。
- 主役は住民で、それを行政・専門家や事業者が支えていく構図が大事。地元の方々は気づきにくいかも知れないが、外部の人が地元の宝や資源を発見していく部分も多い。課題があったとしてもそれも1つの個性であり、それをどう解決していくかというプロセス自体が財産・遺産となる。
- 「まちづくりとは町に住んでいる者が、その街を良くするために力を合わせることである」という言葉がある。地元の方々が中核になって専門家や行政等の支援を受けながら、外部の人も含めた形でまちづくりを進めていくことが、今日のテーマである、「まちづくり」や「地域づくり」である。
- 黒川小学校は、今休校しているだけなので、その活用を考えた時、色々な学びの場として活用していくのが良いと思う。現在は公民館ではあるが、多様なグループワーク等をうまく企画していけば地域に反映するように、役立つような形で結果が結びついていけば一番良いと思う。まさしく新たな「黒川学校」として、日本一の里山を見つめ直す、学びの場として施設が活用されればという提案をしておきたいと思う。
- まち並みや景観は空気みたいなもので、日常の中でそれが悪くなったり非常に大きな脅威が押し寄せないと、その価値になかなか気づかない。そういうものだからこそ今改めて価値を見つめ直して、それをしっかり評価して、未来に活かして、つなげていけるようにするのが今の世代の務めである



基調講演の様子

2. パネルディスカッション

「景観」の視点から旧黒川小学校を見つめ直す

コーディネーター：明石工業高等専門学校建築学科 教授 八木 雅夫 氏

パネリスト：神戸フィルムオフィス 代表 田中 まこ 氏

：森島吉幸建築研究所 所長 森島 吉幸 氏

：黒川自治会 会長 畑中 隆 氏

：川西市都市整備部 部長 朝倉 一晃

【テーマ】『「景観」の視点から旧黒川小学校を見つめ直す』について

- ・ 北校舎・南校舎の両棟残した方が良かった理由は、カメラを通して見た時にスペースの奥行感や広がりがある。北校舎だけではそれが失われてしまう。(田中氏)
- ・ 川西市の景観の考え方は、日常の景観を大切にすること。文化財的な保存ありきの考え方ではなく、南校舎を含めて利活用の視点から考えていくことが重要。出来れば現役で、このまま使ってほしい。しかし、黒川の今後を考えた時に、里山黒川の情報発信基地になるべきである。先日行った阪神地区ヘリテージマネージャー見学会では、「南校舎はそもそも里山の一部である」という意見が結論。積極的に使用し、特にハイカーを対象とした施設などが活性化の案として考えられる。(森島氏)
- ・ 地元の話しとして、公民館機能だけでなく、避難所機能が求められている。そのため、これまでの休校措置から廃校にして、南校舎も取り壊して新たに景観に配慮された公民館にしようという計画で動いていた。しかし、黒川小は南校舎を含めて、小さい集落の中に小さな瓦葺きの木造の校舎がベストマッチしていると考えている。黒川住民100%の意見ではないが、わざわざつぶすことはない。ただし、これから何に活用していくかによって、残した価値が変わってくると思う。南棟は昭和の建物という印象を持たれており、北棟が主役で南棟が脇役という捉え方をされている。(畑中氏)
- ・ 建築年代の話題が出たが、文化財の基準として建設後50年以上で一定の価値が認められている。地元にとって大事であると、自信を持って思っている。(八木氏)
- ・ 景観計画を作って終わりという自治体が多い中で、川西市はどのように考えているか。(八木氏)
- ・ 今後の取り組みを示した計画であり、基本理念や目標のもとに、黒川小の今後について市・市民・事業者全体で考えていくために本フォーラムを開催した。(朝倉)
- ・ 建物の良し悪しではなく、歴史的な意味合いが大切。黒川小は、住民の思いのもと、明治・昭和に生まれた。この兄弟関係で歴史が繋がっていた。単体それぞれの建設された時代は意識せずに、セットで考えることが重要。(森島氏)

【来場者からの意見】民間会社に運営を任せれば良い。

- ・ 方法の1つとして良いとは思いますが、里山黒川の場合、地元の方で何とかできないかなと思う。民営化したとしても、地元の人とうまく運営できるようになればと思う。(森島氏)
- ・ 文化財指定がなければ、民間が勝手に外装内装を改造するが、文化財指定されていればそれをコントロールすることができる。ただし、民間の参画は減る。地元の人を守るのであれば指定管理者制度の活用が有効だと思う。民間のアイデアに関しては賛成。(田中氏)
- ・ いま議論があった内容で市として悩んでいるのが本音。建物を使用する以上は、耐震性の問題の整理等、安心安全にする義務が市にある。そのための費用算出等を経て、一部を取り壊して建替えた方が安くなるという結果から、これまでの話しがあった。今後再検討を進める中で、市が所有しながら使ってもらおうというパターンや、市と民間で一緒に役割を検討しながらやっていくパターンもある。今後、それらを洗い直ししていく。市としても大事な建物だが、うまい決着点を見いだせない。(朝倉)



パネルディスカッションの様子

- ・ これまでの意見から、南北一体で黒川の拠点として活用していくべきだというのは明らか。黒川の魅力の整理・再評価をすることが必要。経済的にも、利益がでないといけない。三位一体（にないて・しくみ・おこない）の根本は住民であり、地元の方が中核にいないとその良さ・環境等が維持できない。地域一体となって考えていかなければならない。これは行政でも民間の仕事でもなく、地域全体で三位一体で考えていくべきことであり、そのスタンスを崩さないことによって、本来持っている良さを次代につなぐことができる。（八木氏）
- ・ 対象によってアピールの仕方が変わってくる。たとえば、外国人やIターンの若者が移り住む環境で必ず必要な物は wi-fi 環境である。デジタルマップ等により人件費をかけずにグローバルに対応できる。また、アクティブシニアは今、黒川にハイキングに来ているので、これからハイカー用の整備をしていると遅い。今の40代が20年後に黒川にどれだけの魅力を感じて押し寄せるかを考えることが必要。トータルにマーケットを考えて誘致することが大切。（田中氏）
- ・ 時間を掛けられない状態であることがわかった。黒川にはメインとなる観光資源がないと考えているが、日本一と「言われている」里山を1日楽しむ日帰りツアーが増えてきている。何がメインで何をしに来てもらうか。この里山景観の中に木造校舎がある。ただそれだけだが、それが魅力と感じている。行政が観光地として検討しているのは大変ありがたいこと。（畑中氏）
- ・ 郷土館等で活動している「東谷ズム」というものがある。東谷小と黒川小、一体で活動が広がればと思う。地元発意のそういう盛り上がりが大事。歴史を守るにも地元が大事。また、黒川の魅力は、妙見山のハイキングとセットで里山がある。目玉がなくても、それぞれがコツコツで良い。例えば竹田城は目玉だが、そこに行って終わってしまう。黒川は、1日滞在できるちょうど良さがあると思う。（森島氏）

【まとめ】

- ・ 言い続けることで認知される部分もあるので、「日本一」を言い続けて、その方向に持っていくことが大切。何よりも大切なのは、三位一体で進めること。地元だけに負担を掛けずに、そこに関わるそれぞれが「自分事」として考える・動くことが重要。楽しいこと、大変なことを覚悟した上で、自分事として自分のふるさと黒川・好きな場所黒川がもっと良い所になるために自分は何ができるのかという立場で、動き出しを始める時が来ていると感じる。黒川小については、しっかり残して、みなさんの思いが実現できる場として活用していただければと思う。（八木氏）

アンケート集計結果（回答 21 件）

- ・ 住民中心になって取り組むことが大切というのは、納得、感心した。南校舎を残すならば、昭和 30 年代の雰囲気如何に表現するか、醸し出すかがポイント。
- ・ 黒川小の建物が何かをしてくれるのではないと思う。地域の人が楽しみながら活動し住みつつけていくことが、最大の地域の財産であり、人が魅力の里山づくりであり、外部から見て本当に素敵なところだと思った。